長崎から世界へ発信！

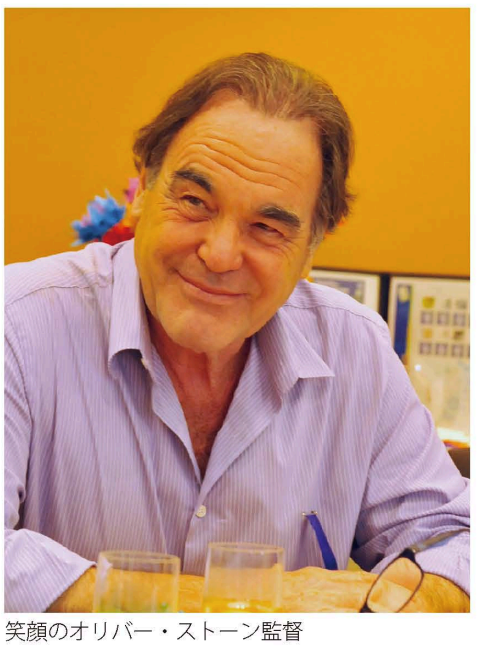
今、私たちが伝えたい平和への思い

今年も全国から集まった7組の親子記者

ナガサキ ピース・タイムズ
非核協 おやこ記者新聞
第6号
発行者
日本非核宣言自治体協議会
（にほんひかくせんげんじちたいきょうぎかい）
〒852-8117
長崎県長崎市平野町7番8号
長崎市平和推進課内
電話 095-844-9923
FAX 095-846-5170
E-mail info@nucfreejapan.com
ホームページ
http://www.nucfreejapan.com
2013年
8月9日(金)
NAGASAKI PEACE TIMES

O・ストーン監督とP・カズニック准教授が語る

～国の壁を越えて真実を伝えていくことの大切さ～



笑顔のオリバー・ストーン監督

映画監督のオリバー・ストーンさんと、アメリカン大学で歴史を教えているピーター・カズニックさんが知り合ったのは17年前で、カズニックさんの講義にストーンさんが来て、お昼を一緒に食べて仲良しになったそうです。2人は最近、一緒に戦争の歴史の本を出しました。

2人が感じている平和の色は虹色で、理由は国と国がつながるからだそうです。逆に恐ろしい戦争には、色は感じないとも言っていました。

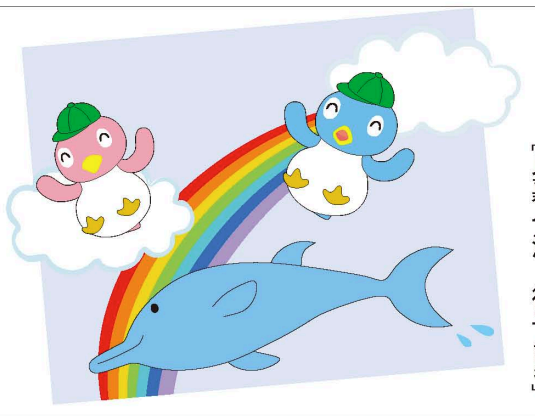
ストーンさんはベトナム戦争を体験しています。その恐ろしさを伝えるために、戦争をテーマにした映画を作っていると話してくれました。それを聞いて、今も戦争の辛い記憶が残っているのだな、と思いました。

日本とは違い、アメリカでは戦争や原爆は良いことだと教わったと聞いて、同じ地球に住んでいるのに見方が違うことにビックリしました。大人になってから戦争は良くないことを知った2人の、「アメリカの人にも本当のことを学んでほしい」との言葉に、私たちも真実を学んでいこうと思いました。

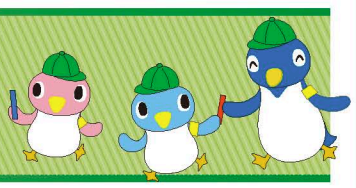
［大家 広平・玲子 記者］
［敦賀 琴星・和芳 記者］
［比嘉 七海・律子 記者］

両氏へ花束贈呈を終えて、みんなで記念写真

質問に答えるピーター・カズニック准教授



長崎から「平和」を発信する人々



被爆68周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

地球上の一人

～感謝して生きることの大切さ～

国境なき医師団日本会長の黒崎伸子さん

黒崎伸子さんは、国境なき医師団の一人として危険な場所などで医療の仕事をし、多くの命を救っています。黒崎さんが活動した国の中には、内戦でけがや手足を無くした子もいましたが、みんな素晴らしい笑顔を持っていました。だからこそ今ある生活を当たり前と思わず大切にしてほしいと話されました。

また、「十分な施設もなく、予防接種もできないために、治せる病気も治せないことを体験する中で、人を救うためには、物資を運んでくれるスタッフなど多くの人の協力が必要。医師一人だけでは何もできないと強く感じました。だから、皆さんには『地球上の一人』ということを忘れず、周りの人に感謝して生きてほしい」とおっしゃっていました。

ぼくも将来黒崎さんのようなお医者さんを目指していきたいと思いました。

［野中 太一・美恵 記者］

平和学習部員としての活動

～県外の子どもたちに平和への思いを伝えたい～

高校生一万人署名活動をしている宮本佳奈さん

9日、活水高校平和学習部員・宮本佳奈さんを取材しました。県内で唯一の平和学習部では、高校生一万人署名活動、ピースボランティア、ふりそでプロジェクトなどの活動を行っています。宮本さんは主に一万人署名活動を担当しています。

一万人署名活動は今年で13年目を迎え、これまでに85万人分の署名が集まりました。宮本さんは100万人を目指して、さらに活動を続けたいと語っていました。

宮本さんの将来の夢は県外の小学校の先生になることです。長崎で行った平和活動の体験を活かして、県外の子どもたちにも平和の尊さと大切さを伝えたいと語っていました。

［敦賀 琴星・和芳 記者］

平和を担う次世代の想い

～平和大使の西ノ首さんにお会いして～

高校生平和大使の西ノ首百香さん

9日、高校生平和大使の西ノ首百香さんを取材しました。小学生のころから様々な平和活動に関わったことがきっかけで、平和大使に応募したそうです。平和の大切さを知ってもらい、関心の無い人を減らしたいという思いで署名活動を行っています。

そんな西ノ首さんでも、まだ知らないことが沢山あるので学びたいと言います。今までの学びを通して考える「平和」とは「一人ひとりが当たり前の生活をすること」で、「命に重い、軽いなんてない、平等なんです」と話してくれました。

これから西ノ首さんは、軍縮・不拡散の分野で活動する若者に対して外務省が認定した、初代ユース非核特使として、被爆国の思いを世界に発信していくそうです。

［朝倉 一晟・みゆき 記者］

平和へのメッセージ 2013

６８回目の「ながさき平和の日」を迎えた今年は、平和祈念式典に出席したかたたちに、それぞれの思いをこめたメッセージを書いてもらいました。

戦争を防ぎ、武器をなくすために頑張りましょうと呼びかけるオランダのダミレスさん

●大家 広平・玲子記者

世界中が平和になることを望む、イラク クルジスタン自治区から来たソマ・アブデュラさん

●野中 太一・美恵記者

自国の悲しい歴史から、戦争のない平和な暮らしを願うイラク クルジスタン自治区のかたがた

●大家 広平・玲子記者

個々の活動が世界平和につながる！

核兵器をなくすために
～調漸さんに話を聞いて～

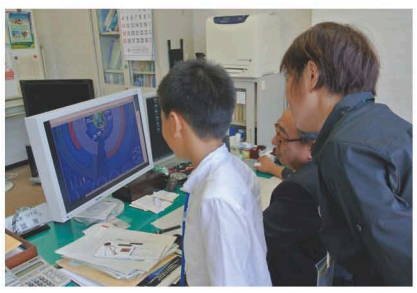
調漸さんは、長崎県・長崎市・長崎大学でつくる核兵器廃絶長崎連絡協議会会長で、核兵器を無くすにはどうしたらいいかを話し合ったり、研究をしたりしています。

調さんは叔父を原爆で亡くされていて、自身も被爆2世です。ヨーロッパなどでは、最近になってようやく”核兵器の非人道性“が言われるようになったとおっしゃっていました。核兵器を無くすには、ぼくたちがその事について知り、核兵器の恐ろしさを伝えていくことが大切だと話されていました。

長崎大学理事・副学長でもある調 漸さん

ぼくは、調さんの話を聞いて、多くの国民や世界中の人々にその事を伝えていきたいと思います。そして、被爆者のかたが元気でおられるうちに核兵器がなくなってほしいです。

［野中 太一・美恵 記者］


調さんに説明を受ける様子

長崎原爆のことを伝えて日本と世界をつなぐ
～私たちに今できること～

ナガサキ・ユース代表団の下田杏奈さんと斉藤佑布子さんに取材しました。

2人はスイスに行って核兵器廃絶を訴えたり、現地の日本語補習学校で子どもたちに長崎に落とされた原爆のことを教えたりしたそうです。出会って半年の2人が姉妹みたいに仲良くできるのは、お互いに尊敬できるからだそうです。そして、教師をめざしている2人は、多くの人に原爆について知ってもらって、未来につなげたいと言ってました。

核兵器を私たちが住んでいる世の中からできるだけ減らそうとしている杏奈さんと佑布子さんを見習って、私も核兵器をなくす活動をしてみたいと思いました。皆さんも戦争について考えてみましょう。

長崎の若者でつくるナガサキ・ユース代表団の下田杏奈さん（右）と斉藤佑布子さん（左）

［比嘉 七海・律子 記者］

今、決意と行動を
～音楽で原爆と平和を伝える～

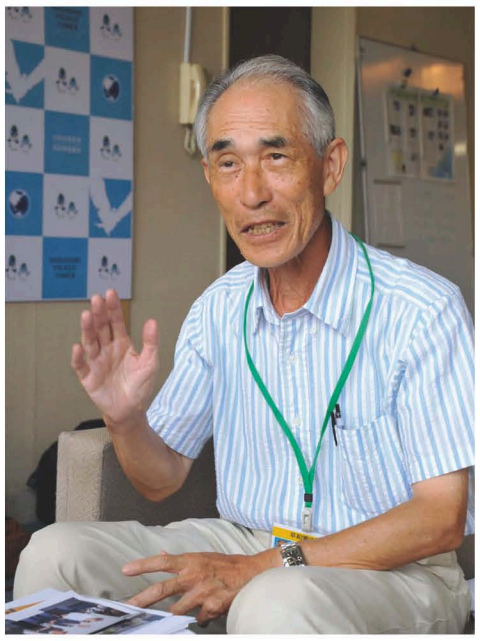
小笠原一弘さんは、ニュージーランドで初の海外公演を果たした合唱団の団長さんです。

いろいろな思いを伝える方法がある中、小笠原さんは音楽を通じて、原爆の悲惨さを世界の人々に伝えています。私も音楽は心に残るので、素晴らしい方法だと思います。

「車いすの語り部」として知られた、故・渡辺千恵子さんの生涯を描いた合唱組曲「平和の旅へ」の中で、小笠原さんが一番好きな歌詞は「未来は若者たちのものですが　核兵器のない平和な未来を築くのは　今を生きる私たちの　決意と行動にかかっています」という所だそうです。私もこの部分が気に入りました。

平和はつくるものです。私も原爆の悲惨さをがんばって伝えていきたいと思います。

［菅崎 香澄・延子 記者］


（公財）長崎平和推進協会音楽部会部会長の小笠原一弘さん

海外や東日本大震災の被災地などから平和祈念式典に出席されたかたがた

高尾小学校6年生の柳本晃さん
●比嘉 七海・律子記者

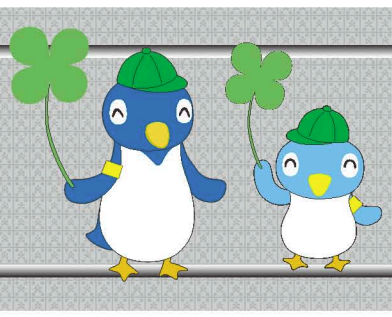
式典で献花をした長崎大学教育学部附属小学校の原口さん
●野中 太一・美恵記者

城山小学校の5年生・津村菜名さん（右）と6年生・佐々木優気さん（左）
●比嘉 七海・律子記者

福島県南相馬市から来た中学2年生・若盛葉月さん
●敦賀 琴星・和芳記者

東日本大震災の被災地である福島県川内村から来た猪狩貢副村長
●北畑 希実・理恵記者

戦争のない世界



No More Wars

～戦争が人間から正しい判断を奪ってしまう～

広島出身の近藤紘子さんは生後8カ月の時に、爆心地から1・1キロの所で被爆しました。近藤さんは「戦争はどちらの国も傷つけてしまう。繰り返さないでほしい。核兵器をなくしてほしい」とおっしゃっていました。

毎年８月長崎を訪れる近藤紘子さん

近藤さんは10歳の時に、広島に原爆を落としたパイロットのロバート・ルイスさんに会いましたが、会う直前まで「彼はとても悪い人で、仕返ししてやろう」と思っていたそうです。しかし、実際に会ってみると、大きなあたたかい手をした人で「私は何てことをしてしまったんだろう」と涙を流されました。そんなルイスさんを見て、彼もまた苦しんだのだなと思ったそうです。

私は戦争が人間から正しい判断を奪ってしまったんだと思います。戦争は二度と繰り返してはいけないと思います。そして、万が一、何かあった時も、ルイスさんの涙を思い出し、いつでも正しい判断ができるようにしていきたいと思います。

［菅崎 香澄・延子 記者］

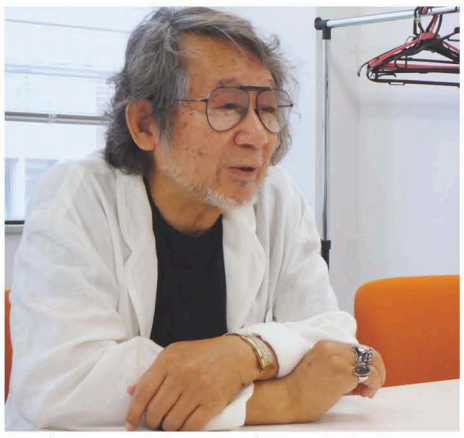
大林宣彦監督から未来の子どもたちへ

～平和について考えよう～

映画監督の大林宣彦さんに、昨年公開されたご自身の作品『この空の花－長岡花火物語』への想いを伺いました。

新潟県長岡市では、毎年、長岡空襲と同時刻に追悼の花火を上げています。戦争体験者にはつらい事ですが、未来に伝えなければならない、平和への願いをこめた花火です。爆弾と花火は同じ作りですが、一方は人を殺すもの、一方は平和を祈るものです。

人間は平和を壊す事もつくる事もできます。大林監督は「戦争に勝つ事が平和だと考える国が多い中、日本は敗戦から学び、戦争を無くすことが平和だと訴える勇気を持たなければいけない」とおっしゃいました。



映画製作を通じて平和を訴える大林宣彦監督

私も過去を知り、勇気を持って平和をつくっていこうと思いました。

［北畑 希実・理恵 記者］

長崎で学び、全国へ

～大学生協連の平和活動～

「Peace Now! Nagasaki 2013」学生リーダーの貞方翔子さん

大学生協連「Peace Now! Nagasaki2013」の学生リーダー・貞方翔子さんにお話を伺いました。全国の大学生が集まって、被爆遺構をめぐるフィールドワークや被爆者講話を聞いたりしています。活動を通して、平和な社会をつくるには何をすればいいのかを考えています。

考え方が異なるたくさんの学生が集まる中で進めていくのは大変な事も多いようです。しかし、知らなかった事やいろんな人の考えを知る事ができ、自分自身の成長を感じているとおっしゃっていました。

そして、「身近なところで幸せを感じる事、自分の国を知る事で、無意識ではなく意識を持って生活する事が平和を考える一歩」と話してくれました。

「Peace Now! Nagasaki 2013」に参加中の学生たち

［北畑 希実・理恵 記者］

忘れないで1945年8月9日11時2分

～平和をつくる感謝の心～

城山小学校を訪れ、被爆者でピースガイドの池田松義さんを取材しました。原爆で家族をなくし、一人生き残り大変な苦労をしましたが、沢山の人々に支えられたお返しに自身の体験を話されているそうです。アメリカの人すべてが原爆に賛成したのではないので、アメリカが憎いのではない、だからやり返すのではなく、終わりにして平和をつくっていこう、との考えでした。「戦争がなくなることが平和ではなく、相手との違いを認め対話することが平和につながる。また、日本は豊かだけれど心が貧しいので、沢山の人に支えられ生かされているという感謝の心を忘れないでほしい」との言葉が心に強く残りました。

［大家 広平・玲子 記者］

今年、国の文化財に登録された旧城山国民学校校舎

城山小学校の平和祈念館ガイドをしている池田松義さん

光、映像、言葉で導く

資料館で知り、祈念館で祈る

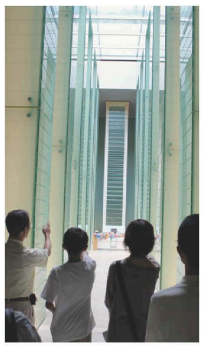
～智多館長がよせる祈念館への想い～

長崎市出身の智多正信館長

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の館長である、智多正信さんにお話を聞きました。智多館長は、世界の人々が被爆者のかたがたのために祈ってほしいという思いで来館者を迎えています。そういう思いが祈念館には沢山つまっています。

例えば、多くの被爆者が水を求めて亡くなった事から、水盤・滝が設置され、館内の造りにも巡礼の意味がこめられています。長崎原爆資料館に隣接されているのも、資料館で学び知った後、祈念館で祈ってほしいという願いからです。

その祈念館も今年開館10年目という節目を迎え、来館者が100万人に到達しようとしています。ぼくたちも祈念館の存在を多くの人に知ってもらい、原爆で亡くなられたかたがたに祈りをささげてもらいたいと思いました。［朝倉 一晟・みゆき 記者］


追悼空間

伝えたい思いから選んだ仕事

～おやこ記者新聞OB前田さんをたずねて～

学生ボランティアから
新聞記者になった前田敏宏さん

おやこ記者新聞の学生ボランティア経験者で、現在長崎新聞社で記者として活躍する前田敏宏さんに取材しました。

長崎で仕事をする前田さんは、実は愛知県出身。高校の修学旅行で長崎に来た時に、被爆者のかたが泣きながら体験談を話しているのを聞いて、自分は何も知らなかったんだと思い、そして、県外の人にも伝えたいと思って、記者になったそうです。

前田さんは、自分のように長崎の原爆を知らない県外の人にも平和について考えてもらうことが課題だと言います。「平和というのはふつうの毎日。その中で人を思いやる気持ちが大切だ」と話していました。

私も原爆や平和のことについて多くの人に伝えたいと思いました。

［敦賀 琴星・和芳 記者］

光の道を歩いて

～「平和の灯」に参加して～

8日、「平和の灯」に参加しました。平和公園内には平和への願いを込めて、市民手作りのキャンドルが灯されました。

「平和の灯」は毎年4月から準備を始めています。ボランティアリーダーの池田ツヨミさんは、「何かをしようという気持ちが大切。かたちではなく心」と話します。

ボランティアリーダーの
池田ツヨミさん

約300人のボランティアの中には、海外からの参加者も多数いますが、同じ平和への願いが広がっている事を感じました。

［北畑 希実・理恵 記者］

会場にはキャンドルの明かりが灯ってステキでした。また、平和の泉で行われたコンサートでは、歌声がきれいで、聞いている人をすごくハッピーにしてくれました。演奏では、ウインドチャイムの音色が心にひびきました。来年はみなさんもぜひ聴きに行ってください。

［比嘉 七海・律子 記者］

点灯された市民手作りのキャンドルによる美しい光の情景

平和は山里から

～平和をつなぐバトン・山里中学校～

山里中学校平和委員会のみなさん

9日、山里中学校で行われた平和祈念集会を訪問しました。爆心地に最も近い中学校である山里中学校では、平和委員会の生徒のみなさんが中心となって、集会を作りあげています。平和のバトンをつなげるために取り組んでいる姿が、とても印象に残りました。

［朝倉 一晟・みゆき 記者］

この日は長崎全域の小・中学校が登校日で、平和集会を行っています。山里中学校の生徒会に平和委員会があるのにびっくりしました。平和委員長の森田理絵さんと黒川大誠さんは、「平和は山里から」をスローガンに1年間頑張ってきたそうです。

これからもこの集会はずっと続いてほしいと思います。

［菅崎 香澄・延子 記者］

「平和の誓い」に供えられた折りづる

学んだ「戦争体験と平和」

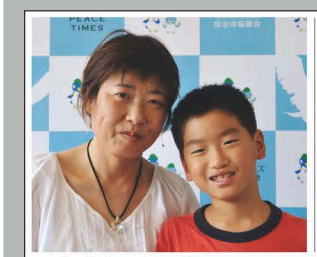
６８年目の暑い夏を迎えました。今年は、日本非核宣言自治体協議会（非核協）主催の親子記者募集に、全国から１４２組の応募があり、記者7組が参加することになりました。親子記者のみなさんは、長崎の取材に先がけて、それぞれの地元で「平和」について事前取材をしました。テーマからひとつを選択し、記事にまとめています。1）家族みんなで考えた平和、2）ふるさとにある平和関連施設を訪問して学んだこと、を聞いて、感じたこと。ここでは、親子記者のみなさんが地元で学んだ「戦争体験と平和」についてのレポートをご紹介します（編集部）。

北海道ブロック　北海道北見市
大家 広平さん（5年生）
玲子さん

北海道ブロック　北海道北見市
敦賀 琴星さん（4年生）
和芳さん

近畿ブロック　大阪府豊中市
北畑 希実さん（5年生）
理恵さん

中国ブロック　広島県尾道市
菅崎 香澄さん（5年生）
延子さん



関東ブロック　茨城県神栖市
野中 太一さん（5年生）
美恵さん

四国ブロック　高知県高知市
朝倉 一晟さん（6年生）
みゆきさん

中部ブロック　長野県松本市
比嘉 七海さん（4年生）
律子さん

沖縄ブロック　沖縄県沖縄市
比嘉 七海さん（4年生）
律子さん

北海道ブロック　祖母に聞いた戦争の話

私のおばあちゃんは昔、熊本に住んでいました。長崎に原爆が落ちた時は4歳でした。おばあちゃんの家は農家でした。戦争が終わって、おばあちゃんの実家ではご飯を多めに作っていました。それは、戦争でけがをした人が、おばあちゃんの家にご飯をもらいに来るので、その人たちにご飯を分けるためだったそうです。木陰の涼しい場所にご飯とおかずを持っていき、ご飯を食べさせてあげていたそうです。

［敦賀 琴星 記者］

関東ブロック　とても身近だった被爆体験談

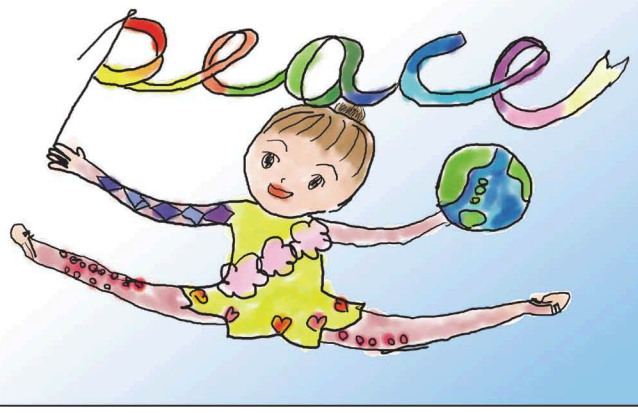
私は戦争体験談をご近所の高橋慶子さんに聞きました。慶子さんは大正15年生まれ。現在87歳。終戦の昭和20年は19歳で山梨にいたそうです。

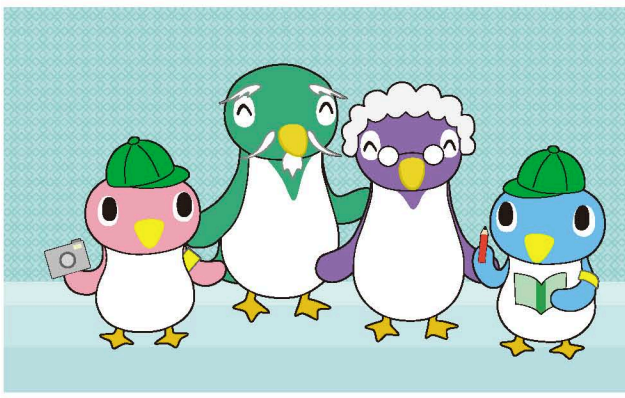
慶子さんは戦後の話もしてくれました。昭和28年、ご主人が長崎県庁耕地課に就職、長崎県に移り住んだそうです。長崎はまだ荒れ野原で、焼けた柱を削って平和公園の近くに家を建てたそうです。平和祈念像の除幕式を見に行った話もしてくれました。

長崎で仲良くなった人たちの話も聞かせてくれました。中には、原爆投下3日後に親戚を探しに長崎に来たかたがいたそうです。そのかたは後日、被爆後遺症で亡くなったそうです。別のかたは、自分が買い出しに行っている間に、原爆が投下され、子ども3人、ご両親、義妹、みんな亡くされたそうです。慶子さんが知り合った頃には、そのかたの旦那さんが兵隊から帰ってきて、また子どもが生まれていたとのことですが、「みんな元気でいるかしら」と心配していらっしゃいました。多分、放射能の影響のことを言われたのだと思います。

慶子さんに若い人たちに望む事を聞いたところ、「二度と戦争はしないこと」、「核実験など絶対しないでほしい」とのことでした。いつまでもお元気でいてほしいと思います。

［菅崎 香澄 記者］





私たちのふるさとで

家族で考え、平和施設を訪れ、戦争体験談を　聞きました

長崎は原爆投下から
抽選で選ばれた親子
今回は次の３つの
3）戦争体験者に話

中部ブロック　姉といっしょに考えた平和

僕の姉が、昨年広島への平和学習へ参加したので、姉と「平和」について話そうと思いました。

まず、姉へ参加してみての感想を聞いてみました。「戦争の恐ろしさは、聞いたりしていたけど、実際の戦争による負の遺産を自分の目で見たら、本当に恐ろしいと思ったよ。一晨にも自分の目で見てきて欲しい」と言っていました。この話を聞いて僕は、僕を始めとする戦争を知らない沢山の人たちに、戦争が残した恐ろしさを、自分たちの目で見て、心に焼き付け、この世に無駄にしてよい命はひとつも無いと言うこと、戦争は二度と繰り返してはいけないことを思ってほしいと感じました。

［朝倉 一晨 記者］

四国ブロック　岡村さんの「ぼくの見た高知大空襲」

僕が長崎の親子記者に参加したのは、戦争の事をもっと知りたいと思ったからです。僕の祖父はお父さんを戦争で亡くしており、お父さんを知らずに大人になったと聞いています。

高知県でも大きな被害があった大空襲について岡村正弘さん（草の家館長）から体験談を聞かせてもらいました。一番ひどい空襲の時、たくさんの焼夷弾が落とされ防空壕にいたお母さんと妹さんは亡くなられ、とてもつらい悲しみが続いたそうです。その後も悲しい事、つらい事は次々と起こったようですが、現在までしっかり生きてこられたことは、とてもすごい事だと思いました。

僕は多くの人が犠牲になり、多くの人が悲しみ続ける戦争が二度と起こらない平和な国にしていきたいです。

［野中 太一 記者］

近畿ブロック　ぼくが聞いた「沖縄戦」と「広島原爆」

ぼくたちの住む豊中市は今年、非核平和都市宣言30周年を迎えます。戦時中、豊中市は空襲を6回うけ、大阪府で3番目の大きな被害を受けました。調べてみると、近くの公園に慰霊塔が、駅前には平和の像がある事を知りました。

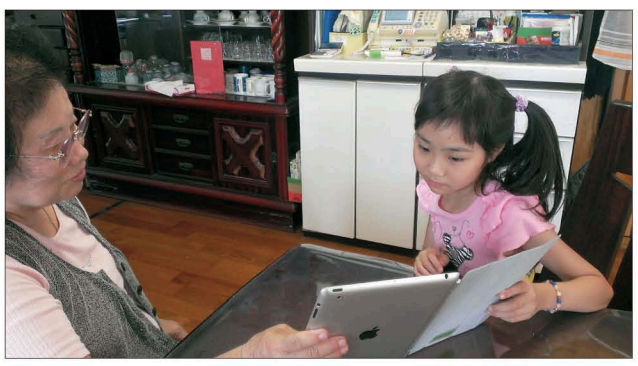
今回の取材では、沖縄のひめゆり隊の方のお話を聞くことができ、艦砲や銃撃の怖さ、人々の苦しみや悲しみ、そして命の大切さを教わりました。

3歳で被爆した広島の祖母からは、多くの人が亡くなり傷つき、その後も後遺症や差別に苦しんでいることを聞きました。

沖縄戦や広島の原爆の悲惨さにおそれを感じ、ふだん何気なく過ごしている豊中の町も戦争の被害にあったことに驚き、今のぼくたちの平和な生活が、貴重なものだということを実感しました。

［大家 広平 記者］

沖縄ブロック　おばあちゃんに聞いた戦争の話



沖縄の「慰霊の日」である6月23日に、おばあちゃんから戦争の話を聞きました。

小学1年生だったおばあちゃんは、防空壕の代わりに多くの県民が使っていた沖縄の大きなお墓の中（大人15人くらい入れるらしい）に隠れていたそうです。「暗くて、怖そう…」と感じました。食べ物は、芋、カボチャや豆ぐらいしか無かったそうです。

《人が人をころす》というのが《戦争》でした。

命を大切にして、もう二度と戦争がおきないように！《平和》の努力をしたいです。

［比嘉 七海 記者］

中国ブロック　紙芝居で描く空襲体験者の声～戦争はまだ終わらない～

「因島空襲」について紙芝居を作っている田子森早苗さんにお話を伺いました。田子森さんは空襲体験者に直接会い、それぞれの背景にある戦争を子どもたちにも分かりやすく紙芝居で伝えています。長い年月の間に、体験者の細かい記憶は曖昧になっている事も多いようです。しかし、一貫して言えることは、「戦争は二度としてはいけない」、「平和を守るために一人一人が努力していかなくてはいけない」ことだとおっしゃっていました。また、「空襲で子どもを亡くされたかたは、決して口を開くことはありませんでした。そういうかたの戦争は60年以上たってもまだ終わっていません」という田子森さんの言葉がとても心に残りました。

［北畑 希実 記者］

親子記者に贈る「寸劇」と「平和朗読劇」
編集ボランティアスタッフが劇制作！

おやこ記者新聞の編集をサポートしている、編集ボランティアスタッフ4名（チーム・ナピタンズ）が、親子記者事業を広く理解してもらいたいと、取材方法を説明した寸劇（8日上演）と、被爆者の平和への思いを描いた平和朗読劇（最終日上演）を制作し、親子記者7組の前で披露しました。

寸劇と平和朗読劇『2011親子記者取材日記　としさんのあやの食堂』に出演協力してくれたのは、大村市、諫早市、長崎市在住の市民役者のみなさん。短期間に集中稽古を重ね、親子記者の心に届くよう、「長崎発の平和への思い」を胸に熱演しました。

事務局だより

おやこ記者新聞は今年で創刊から6年目を迎えました。今年は猛暑の中、世界に向けて平和のメッセージを発信されている皆さんを親子記者が取材しました。親子記者の皆さんが取材を通して平和への思いを新たにし、自分たちにできることを実行して、平和の種を全国でまいてくれることを期待しています。

取材風景はホームページでも公開しています。親子記者の取り組みを見て、皆さんも平和について考えてみてください。【松尾 涼子】

後編 記集

近畿ブロック　大阪府豊中市

大家 広平・玲子 記者

長崎で過ごした4日間

初めて長崎の原爆のことを学び、平和祈念式典に参列し、外国のかたとも交流できてよかったです。爆心地に行った時には原爆がこわく、悲しくなりました。被爆者の池田さんからは、平和につながる生き方を教わりました。長崎で感じたことをまわりの人にも伝え、平和への想いを広げていきたいです。

北海道ブロック　北海道北見市

敦賀 琴星・和芳 記者

長崎で勉強したことを北海道で伝えます

いろいろな人の話を聞いて、戦争というのは悲しいことだと改めて思いました。長崎では小さい頃からいろいろな場所で平和を考える機会があることを知りました。

北海道に戻ったら、長崎で勉強したことをたくさんの人に伝えて、平和についてもっと関心を持ってもらいたいです。

中国ブロック　広島県尾道市

北畑 希実・理恵 記者

平和を伝える大切さ

今回、参加できて本当に良かったです。

実際に会って話を聞き、実際に目で見て体験しなければ感じられなったことがいっぱいありました。長崎では、たくさんの平和活動があることを知りました。それぞれの想いを聞くことができ、感動し、力をもらいました。あらためて平和の大切さを学び、私たちもここで勉強してきたことを因島でも伝えていかなければいけないと強く感じました。

関東ブロック　茨城県神栖市

菅崎 香澄・延子 記者

平和は長崎から

今回、いろいろなかたのお話を聞きました。特に心に残った言葉が、「目に見えない物は記憶から消えていく」でした。

今回取材したみなさんも、平和集会、講演、音楽という形で、原爆の恐ろしさを伝えていこうと努力している人たちでした。本当にお会いできてよかったです。

私たちも、茨城に帰ったら、平和の大切さを伝えていきたいと思います。親子で貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

四国ブロック　高知県高知市

野中 太一・美恵 記者

長崎での見聞録

はじめての体験をした4日間でした。長崎に来るまでは、本やテレビでの情報程度でしたが、長崎に入ると何もかもリアルなものばかりで、正直、直視することができない場面も多くありました。式典では、自然と涙が出てきました。

改めて、平和について向き合うことができました。

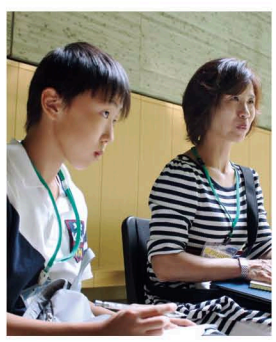
中部ブロック　長野県松本市

朝倉 一晟・みゆき 記者

8月の長崎で学んだこと

8月の長崎は、市民のみならず多くの人たちが、平和に向き合い、原爆の犠牲になったかたがたに祈りをささげていました。その姿に、改めて平和について考えさせられました。

平和とは、戦争や核兵器の問題だけでなく、生きる選択が出来ることだと感じました。私たちが８月の長崎から受け取った平和のバトンをつなげていきたいと思います。



沖縄ブロック　沖縄県沖縄市

比嘉 七海・律子 記者

長崎の思い出

初めての取材と記事作りは、いろんな人に会えてうれしかったです。また、戦争のことを学べたのでよかったです。平和を愛する世界の人、長崎の人の思いを感じました。沖縄に戻っても長崎であった原子爆弾の被害は忘れないようにしたいと思います。

学生ボランティア、13名が親子記者を全力サポート!!

今年は、長崎県立大学シーボルト校国際情報学部 情報メディア学科の金村ゼミの学生を中心に、13名の学生がボランティアスタッフとして参加してくださいました。

（写真上段右から）

♤これからの世代に、平和の想いを伝え続けたいです。＝古門 晃二＝

♡若い世代の平和に関する考えを聞き、刺激を受けました。＝中山 咲＝

♤新しい世代の新しい取り組みに平和の繋がりを感じました。＝中村 大樹＝

♡当事者意識を持って長崎から世界へ発信していきたいです。＝秀島 千尋＝

♤戦争をしないことだけが平和ではないと改めて感じました。＝田中 寛明＝

♡長崎と世界のつながりを自分の目で確かめる事ができました。＝島川奈都美＝

♡平和の発信は私たちのプライドだと改めて感じ合えました。＝田中 楓＝

（写真下段右から）

♡自分自身も平和について改めて考え直す機会になりました。＝近藤 光奈＝

♡平和への想いの広がりを肌で感じることができました。＝河野 美来＝

♡取材を通じて、平和への考えを深めることができました。＝濵田 里穂＝

♡長崎の願いが周りに伝わっていくのを見て嬉しく思います。＝櫻井 伶＝

♡平和は理解から始まると改めて学ぶことができました。＝池上 彩女＝

♡初めての体験でしたが、親子と楽しむことができました。＝柳川智栄美＝